



貝原守一医学振興財団会報

第13号



KAIBARA MORIKAZU MEDICAL SCIENCE PROMOTION FOUNDATION

貝原守一医学振興財団

会報 第13号

目 次

- 巻頭言 P 1
財団理事 天児 和暢 (九州大学名誉教授)
- 平成 20 年度 研究助成金贈呈式記念写真 P 2
- 平成 20 年度 研究助成金贈呈式の挨拶 P 3
理 事 長 佐伯 清美
- 研究助成金贈呈式を終えて P 4
佐伯 仁子 (専務理事)
- 平成 20 年度 研究論文選考過程について P 6
選考委員・橋場 邦武 (理事 長崎大学名誉教授)
- 研究論文選考にあたって P 8
「期待してます」
選考委員・天児 和暢 (理事 九州大学名誉教授)
「助成選考にあたって」
選考委員・小野 順子 (福岡大学名誉教授)
- 平成 20 年度助成金贈呈者一覧 P 10
- 平成 20 年度助成受賞者の論文抄録 P 11
鈴木 淳史氏 (九州大学生体防御医学研究所)
稲田 明理氏 (九州大学大学院医学研究院)
濱田 尚宏氏 (久留米大学医学部)
- 貝原守一賞受賞者 P 14
谷合 啓明氏 (九州大学大学院医学研究院)
Barysheva Oksana氏 (九州大学大学院医学研究院)
- 宮崎一郎奨励賞受賞者 P 15
鉄谷 耕平氏 (九州大学大学院医学研究院)
松崎 慈子氏 (九州大学大学院医学研究院)
- 財団の 20 年度行事 P 16
- 貝原守一遺稿より「戦争と醫學」 P 17

～ 巻頭言 ～

「基礎研究と応用研究」



財団理事 九州大学名誉教授 天児 和暢

昨年は日本の研究者にとって勇気つけられる年であった。4人の日本人がノーベル賞を受賞したからである。この報に接しマスコミや政治家の方々は、日本の基礎研究は高い水準にあると言っているが果たしてそうであろうか。

今回の受賞者は皆御高齢であり、その研究はいずれも若い頃に成されたものである事は明かである。また、二人の方はアメリカでの研究であった事を思うと、そう手放しには喜べない。しかし、今回の受賞は研究のあり方を知る上で格好の情報を提供してくれたように思える。

研究には基礎研究と応用研究がある。日本で成されている研究の多くは応用研究である。応用研究とは、ある基礎研究で得られた成果を応用して行う実験である。その成果は理解しやすく、またいち早く現場で活用でき、評価もしやすい。それに対して基礎研究は、地味でその研究の意味なども直ちには理解が難しい。

生物学で言えば、生物学上の疑問「何故？」を解き明かそうとする研究であり、その発想は研究者の個性や能力に著しく依存している。しかも、どのような結果が得られるのか、当の研究者にも予想困難である。ましてや第三者にはおおよそ理解しがたいであろう。しかし、この基礎研究が衰えれば応用研究も出来なくなる。基礎研究の進展は研究の活力を上げる上でも重要であるが、周辺からの支持が得られがたく、孤独に耐えながらの研究となる。今回のクラゲの蛍光タンパクの解明は正にこの基礎研究の好例であろう。恐らく下村先生の個人的な興味から発展していった研究であろう。そして、このタンパクの発見が、次なる研究へと大きく発展していったのである。

基礎研究への研究助成は重要であろうが、それを受賞対象として選定するのはかなりの勇気のいる作業である。医学に限定するなら更に難しくなる、クラゲの蛍光タンパクは、今では医学研究に重要な役割を果たしているが、それが分離されたときにはどの様にして応用されるかなど、それを理解できた人も少なかったのではないだろうか。医学に新しい展開をもたらすのは地味な基礎研究があつてこそであると考え、勇気を持って基礎研究にも支援の手は伸ばしていかなければならない。



平成21年2月7日（福岡ガーデンパレスホテル）

平成20年度 貝原守一医学振興財団研究助成金贈呈式



平成 20 年度貝原守一医学振興財団研究助成金贈呈式の挨拶

理事長 佐伯 清美



本日、平成 20 年度貝原守一医学振興財団研究助成金贈呈式に、受賞者の皆様、財団役職の皆様、ご多用の中をご出席いただき、開会できますことは大変ありがたく、篤くお礼申し上げます。

受賞者の皆様おめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。

本財団の研究助成金の贈呈は、平成 4 年に始まり、本年までの贈呈者は 69 名になりました。

この多数の受賞者による、広い分野に亘る優れた医学の研究は、我が国の医学、医療の発展に大きく寄与したと存じます。

「研究助成金授与により医学の発展に寄与し、以って社会の福祉に貢献する」という当財団の設立目的を達成していることを信じ、誇りに思っているのでございます。

本日、助成金を受けられる皆様も助成金を有効に役立てていただき立派な研究成果を挙げられるよう、希望し念願いたす次第でございます。

国の厳しい金融政策の施行の中で、中断することなく研究助成金の授与が出来ておりますことは、担当理事の方々の並々ならぬ、ご尽力のお蔭でありまして、この席をお借りして篤くあつくお礼申し上げます。

毎年、各大学より多数の優れた研究論文の応募が続いていますのは、各大学の本財団へのご理解とご協力のお蔭でございます。

また、優れた学識をお持ちの本財団の論文選考委員諸先生の厳正、公正な選考のお蔭であり、心よりお礼申し上げます。

国の方針で、近く財団の在り方が大きく変わろうとしておりますが、私どもは、本財団の基本理念であります「医学の研究を通して社会に貢献する」という創設者の遺志を守り、堅持して行かなければならないと思っております。

財団理事の皆様の一層のご協力をいただき、財団の益々の発展に力を尽くしたいと思っております。

受賞者の皆様に再度お慶びを申し上げ、大変簡単ではございますが、挨拶といたします。

研究助成贈呈式を終えて

専務理事 佐伯 仁子



平成 20 年度貝原守一医学振興財団の公益事業、研究助成金の贈呈式は、紅梅、白梅が凛として咲き競う早春の、平成 21 年 2 月 7 日（土）福岡ガーデンパレスホテルにおいて今年度の受賞者 3 名、財団役員、論文選考委員全員が出席して開催されました。

当日は、開式にあたり佐伯清美理事長から受賞される皆様にお祝いの言葉と、財団役員に日頃のご尽力に対する謝辞があり、今回受賞される方を含めて助成対象者数が延べ 69 名になり、これまでに受賞をされた方のなかには、その後立派な業績を残され、各方面でご活躍されている様子をうかがうと、微力だが医学の振興に貢献でき、財団設立者の基本理念に沿うことが出来る喜びを感じ、今後一層の努力をしていきたいと挨拶をされました。

今回の受賞者 3 名の方々には、それぞれ贈呈書及び助成金が理事長から手渡され、その後論文選考委員会の委員長を務められた橋場邦武理事から論文選考の経過が詳しく説明されました。

続いて選考委員の天児和暢理事、小野順子先生が論文審査に当たったの感想を述べられて式典は滞りなく終了しました。

審査委員長のお話の中で、毎年論文選考の過程で優れた研究論文が一線に並び、惜しくも 3 名選考という枠の中に入りきれない方が数名おられ、その方々の心中を察する時に心が痛むというお話を聴くと、財団運営に携わる一員としても全く同じ思いが致します。

その後開かれた祝賀会では、3 名の受賞者が今回の受賞対象となった研究の内容を簡単に説明され、それに参加者が質問をするという形式で進められました。

その中で、私個人の特に強く印象に残ったのは、研究者の方々の研究資金の調達方法のご苦労で、国から認められた研究費ではとても賄うことが出来ず、研究者自身が助成してくれる先を探しているという現状は、何とか若い研究者の方々が、その研究に集中して没頭できるこのような制度が出来ないものかを感じました。

米国の金融危機に端を発した世界同時不況は我が国にも瞬く間に広がり、日本経済をリードしてきた自動車、電機産業等の大手企業が業績悪化で軒並み大幅な人員削減に踏み切り、ますます経済は悪化し負の連鎖が起こるといった明るい話題が少ない昨今ですが、このような時こそ微力ではあるが、地道に我が貝原財団は医学の振興と発展に今後もこの助成事業を継続できるよう理事の皆様とともに一層の努力をして参りたいと考えています。



【贈呈式の祝賀会】



平成20年度研究助成選考過程について



選考委員・財団理事 長崎大学名誉教授 橋場 邦武

平成20年度員原守一医学振興財団の研究助成には、九州大学6件、久留米大学4件、福岡大学2件の、合計12件の応募があった。産業医科大学および大学以外の研究機関からの応募はなかった。最近では、研究方法として分子生物学的な方法、免疫学的方法、遺伝子学的方法などが共通して広く用いられるようになったこともあって、各教室間の研究分野の境界が重なることも多い。このため、応募者の研究分野を単純に分類することは困難であるが、腫瘍、炎症、再生治療、血管性疾患、遺伝性疾患、などに関連する研究課題が、消化器、呼吸器、循環器、糖尿病、法医学、などの分野から応募があった。

平成20年12月20日に、天児和暢（九州大学名誉教授）、小野順子（福岡大学名誉教授）、橋場邦武（長崎大学名誉教授）の3名の選考委員による選考委員会が開催された。佐伯清美財団理事長が同席され、その御指名によって、橋場が議事を進行した。

選考の方法は例年と同様であるが、合同の選考委員会に先立って、先ず第一段階として、3名の選考委員が、それぞれ独立して、応募書類によって、応募者の研究課題、研究目的、研究方法、これまでの研究歴、研究実績、添付された論文別冊、などを検討した。発表論文については、その数とその内容、論文執筆の筆頭者か共著者か、などの外に、特に論文掲載雑誌の国際的な評価の高さなどを考慮し、これらの諸点を総合して応募研究の独創性、科学性、将来性、実現可能性、などを評価した。

第二段階として、上記のように12月20日に開催した選考委員会において、3委員が予め行った第一段階の評価を持ち寄って、それを公表しあった上で、1課題ごとに意見を交換した。3人の委員の第一段階の評価は必ずしも一致しない点もあったので、率直に意見を述べて検討した結果、最終的には3名の受賞者を一致して推薦することができた。

受賞者と決定したのは、別表にも掲載されているごとく、久留米大学濱田尚宏氏、九州大学稲田明理氏、九州大学鈴木淳史氏、の3氏であるが、いずれも上述の種々の観点より検討して、今後魅力ある具体的研究成果を期待できるものと評価されて、受賞者として選出された。この委員会の決定は、佐伯理事長によってそのまま受理された。

3名の受賞者について、選考委員会で特に評価された点を、筆者の若干の感想も加えて紹介すると、先ず、3名ともに最近5年間の筆頭著者としての論文が10篇前後報告され

ているのみならず、最近の2, 3年の間の論文数も多く、現在極めて活発な研究活動を展開していることがよく納得できた。

久留米大学皮膚科の濱田尚宏氏は、ロンドン大学留学中に、未知であった遺伝性皮膚疾患の原因遺伝子を同定して、筆頭著者として高レベルの国際学術誌に報告し、その後は、Hailey-Hailey病を中心として、種々の遺伝性皮膚疾患の遺伝子解析に関して、genotype-phenotype correlationの研究を進めている。これはやや地味な研究ともいえるが、遺伝性疾患研究の臨床的意義を迫及するものとして、評価された。

九州大学大学院医学研究院幹細胞ユニット糖尿病遺伝子分野の稲田明理氏は、膵β細胞を増殖することを最終目標としている。これまでの研究で膵内膵管上皮細胞からβ細胞が供給されることを証明しているが、今後の研究により、この機序を解明して、膵管上皮からのβ細胞産生の過程を追及し、β細胞の増殖とその臨床的応用までを目指すものである。同氏は米国ハーバード大学ジョスリン糖尿病センターに約5年間留学研究の後、九州大学「次世代研究スーパースター養成プログラム」に応募採用されて、現在、九州大学特任准教授として独立研究する特異な地位を得ており、その研究実績と研究意欲は高い評価に値する。

九州大学生体防御医学研究所の鈴木淳史氏は、大腸癌の悪性度が進行する過程で、大腸癌細胞集団中に、浸潤・転移能を獲得した特殊な細胞が出現するモデルマウスを開発して、浸潤・転移に対する新規阻害剤開発への基盤研究までを目指すもので、上記の稲田氏と同様の九州大学特任准教授に採用された地位を得ており、これまでの多数の研究業績を踏まえて、今後の発展が期待される。

若い研究者への研究助成は本財団設立の最も重要な目的であり、将来性豊かな研究者を助成対象として選出できたことは、選考委員としてもまことに喜ばしいことである。3名の受賞者の着実な研究成果に心から期待するものである。なお、今回の応募者の中には受賞者以外にも立派な研究者がおられたことを付記して、今回の財団研究助成への応募に対して感謝したい。

なお、3名の受賞者には、今回の研究課題に関係ある論文発表の際には、論文後記に本財団の助成を受けられたことを明記し、また、その論文別冊を必ず財団本部に必ず送付されることをお願いしたい。これは、本財団の客観的な貴重な財産となるものであり、また、今後の活動の最も大きな原動力ともなるものであるから、是非とも実行して頂くようお願いする次第である。

以上をもって、平成20年度貝原守一医学振興財団の研究助成選考過程の御報告としたい。

「期待してます。」



選考委員・財団理事 九州大学名誉教授 天児 和暢

研究の評価は、審査員により異なる。これは審査員がそれぞれ異なる研究経歴を持ち、異なる専門を持っていることによる。しかし、お互いに意見を出し合い、議論を重ねていけば必ずと一つの結論に到達する。医学研究という大きなテーマでの募集であるため、多少の意見の差はあっても一つの方向に集約していく。

今回の12課題の応募はいずれもかなりの高レベル研究課題であった。

各審査員はほぼ2ヶ月、申請書とそれに添付されている論文を熟読し、研究の意義、方法の妥当性、その成果の有用性などを慎重に審査し結論を得、この3名の方を選び出した。良い研究というのは、必ずと絞られてくるものである事を実感した。

助成には定員数がある以上やむを得ないことではあるが、選に漏れた研究が悪いということではない。少なくとも上位数名の方の研究の評価は紙一重だと言える。これまで数年に渡って審査を担当してきたが、審査に当たって重要なのは、やはり、審査に提出される書類である。この書類に書かれていることが、その評価を決める唯一の資料となるので、是非、よく推考し自分の意図するところが第三者によく伝わるように作っていただきたい。

研究はその得られた成果により最終的に評価される、審査段階では当然のことながらまだ成果は出ていないが、その成果を期待しての助成である。ぜひ良い成果を上げていただきたい。

研究は何時も予想通りの結果が得られるものではないが、予想もしない結果が得られた時の方が、新たな展開が期待でき、よりよい成果が得られるものである。

重要なのはその絶好のチャンスを見逃さない眼力、或いは洞察力であろう。

助成選考にあたって



選考委員・福岡大学名誉教授 小野 順子

今年度の申請も癌、増殖・分化、再生関連のテーマが続く一方では、まれな病態を対象とした研究の応募もあり、多彩な内容に対する審査となりました。中でも癌の転移や進行に関して、老化や分化といった面からのアプローチの臨床応用を目指した研究は、治療の突破口になるのではとの期待がもたれるものでした。そのような中で大腸がんの浸潤・転移を上皮・間葉転換の現象から検討しようとした鈴木博士の研究は、最先端の基礎研究から臨床医学への流れを示すものとして、一致して高い評価を受けたものでした。

また特殊な、あるいは稀少な研究対象として法医学や皮膚科学からの応募があり、十分に検討をいたしました。疾患の特異性、解析サンプル数およびこれまでの研究の成果が新しい臨床分類と治療体系を形成することを期待して、ATP2C1 遺伝子変異の分析が選考されました。また糖尿病の治療として膵管上皮細胞からβ細胞の新生を目指した研究は夢のあるテーマとして受賞の対象となりました。

その他臨床応用を目指した血管新生や再生、あるいは癌抑制に対する様々な手法の検討などの応募をいただき、学問の進歩を目の当たりにするようでした。

授賞式の席で、研究者の身分保障や資金の調達、助成金の使途など、これまでには話題に上らなかった点に話が及びました。日本における研究者の評価や育成のあり方などについての意見をお聞きできたことは大変有用で、選考にも反映できればと思いました。

今回受賞の対象にならなかったご研究も、それぞれに特徴のあるもので、ぜひとも発展されてご応募いただきますように、また成果を挙げられますことをお祈りしています。

平成20年度 研究助成金授与者

(敬称略)

| 授与者 | 所属機関 | 対象研究テーマ |
|---------------------|--|--|
| 鈴木 淳史 (スズキ アツシ) | 九州大学 生体防御医学研究所 器官発生再生学分野 特任准教授 | 大腸がん細胞の浸潤・転移に対する新規阻害剤の開発に向けた基盤研究 |
| 稲田 明理 (イナダ アカリ) | 九州大学大学院医学研究院 幹細胞ユニット糖尿病遺伝子分野 特任准教授 | β 細胞産生能力に関する基礎研究 |
| 濱田 尚宏 (ハマダ タカヒロ) | 久留米大学医学部 皮膚科学教室・講師 | Hailey-Hailey病におけるATP2C1遺伝子変異と臨床的重症度の相関の検討 |

※今年度の募集について

平成21年度の研究助成論文募集は6月下旬頃に各大学宛に応募要領、申請申込書等をご案内いたします。



平成 20 年度研究助成金受賞者

大腸がん細胞の浸潤・転移に対する新規阻害剤の開発に向けた基盤研究



九州大学 生体防御医学研究所 器官発生再生学分野
鈴木 淳史

わが国における大腸がんの治療成績はとて良く、早期であれば大部分が治癒し、また進行性の大腸がんであっても適切な治療を受けることで治癒する場合が多い。

しかしながら、大腸がん全体の 20～30%ほどに転移(主に肝臓への転移)が認められ、それら転移したがんが原因で亡くなるケースが多いのもまた事実である。それゆえ、大腸がんの転移に対する治療技術が進歩すれば、大腸がんによる死亡率の低下は自明の理と言える。そこで本研究では、大腸がんの転移に対する予防と治療を可能にする革新的ながん薬物療法の開発に向けた基盤科学のひとつとして、大腸がんの悪性度が進行する過程で大腸がん細胞集団中に発生する浸潤・転移能を獲得した特殊な細胞を解析可能なモデルマウスを開発し、その有用性を評価する。

浸潤・転移能を有する細胞の発生には「動く」能力の獲得が不可欠である。大腸がんなど上皮組織のがん細胞が「動く」ためには、細胞間の結合をなくすために細胞間接着複合体を破壊し、結果として細胞極性を持たず運動性の高い間葉系細胞と化す必要がある。この現象は、生物の進化や個体発生・再生に欠かすことのできない上皮-間葉転換 (epithelial-mesenchymal transition: EMT) と呼ばれる現象に似ていることから、近年、がん細胞の浸潤・転移に対する EMT の役割が注目されつつある。そこで本研究では、大腸がんのがん細胞特異的に生体内で EMT を誘導可能なマウスを作製し、大腸がんの転移を再現できる動物モデルを開発する。本マウスから浸潤・転移能を有するがん細胞を単離し培養することで、細胞の移動に着目した阻害剤のスクリーニングが可能になり、また、作製した新型抗がん剤を本マウスに直接投与することで、その効果を生体内で試験することも可能になると考えられる。

β細胞産生能力に関する基礎研究



九州大学大学院医学研究院 幹細胞ユニット糖尿病遺伝子分野
稲田 明理

周知の通り、日本では生活習慣病の一つである糖尿病が深刻な問題となっており、予備軍を含めると国民3人に1人は糖尿病という大変高い割合で発症している。糖尿病が進行した重症患者には膵島移植が行われているが、膵島の生存能力が低いことに加え、日本ではドナー不足等の限界がある。米国では、ドナー不足の問題は少ないが、移植後の長期成績が悪く免疫抑制剤にも問題があり、やはり移植には限界があるとされている。

そこで、移植と平行して研究が進められているのが「再生医療」である。これは、β細胞の供給源である幹細胞（前駆細胞）を見つけ出し、これを刺激して体内でβ細胞を再生、あるいは体外で増殖させたβ細胞を後に体に戻すなどして、インシュリン不足を根本的に解消するという画期的なものである。世界各国では、「幹細胞（前駆細胞）の同定」、つまりβ細胞の起源の研究が盛んに行われている。

申請者はこれまでの研究で、膵臓内の膵管上皮からβ細胞が供給されることを証明した。つまり、β細胞の前駆細胞は膵管上皮に存在する可能性が非常に高いと考えている。

以上のことから申請者はβ細胞を増殖することを最終的な目標に掲げ、本研究でまず、膵管上皮の細胞を詳しく検証することを目的としている。そして、分化に必要な遺伝子群を同定し、そのメカニズムを解明したい。

Hailey-Hailey 病における ATP2C1 遺伝子変異と臨床的重症度の相関の検討



久留米大学医学部 皮膚科学教室
濱田 尚宏

近年の分子生物学の進歩により、多くの単一遺伝子病の原因遺伝子が明らかにされてきたが、個々の症例において当該遺伝子の変異を確定し、データベースに蓄積していくことは変異の部位・種類と臨床症状の相関 (genotype-phenotype correlation) を明らかにするうえで非常に重要である。Genotype-phenotype correlation が明確になれば、経過の予測や症状増悪の予防、遺伝カウンセリングなどを適切に行うことができる。

Hailey-Hailey 病 (以下 HHD) は常染色体優性遺伝を示す皮膚疾患である。青壮年期以降に発症し、腋窩・陰股部などの間擦部に小水疱やびらんを形成する。2000 年に本疾患はゴルジ体膜上に存在する human secretory pathway Ca^{2+}/Mn^{2+} -ATPase protein 1 (hSPCA1) をコードする *ATP2C1* 遺伝子の変異で発症することが明らかにされた。

今日まで 90 以上の変異が報告されているが、genotype-phenotype correlation は明らかにされていない。最近我々は、日本と韓国から収集した HHD 患者において、*ATP2C1* 遺伝子の解析を行い、いくつかの新規変異を同定した (Hamada T et al. J Dermatol Sci 51:31-6,2008)。一部の症例において、皮膚から抽出した mRNA を用いて検索を行ったところ、変異に伴う mRNA decay や in-frame exon skipping などが重症度と関連することが示唆された。

今回の研究では症例の追加を行い、*ATP2C1* 遺伝子変異を同定しつつ、様々な分子の mRNA やタンパク質の皮膚における発現を観察することで、genotype-phenotype correlation や病態形成に関与する分子などを明らかにすることを目的とする。得られた知見の臨床応用によって、新しい治療法の開発などが期待されるという点で、本研究は意義高いものになる可能性を十分に秘めている。

平成20年度 貝原守一賞・宮崎一郎奨励賞 受賞者

青藍会 貝原守一賞（九州大学大学院医学研究院細菌学分野 同門会）については下記のごとく決定し、平成20年10月11日開催の青藍会集談会において授与されました。

平成20年度受賞者名（敬称略）

- ・ 谷合 啓明（博士課程修了、現在、総合診療部医員）

論文題名

Concerted action of lactate oxidase and pyruvate oxidase in aerobic growth of streptococcus pneumoniae role of lactate as an energy source.

掲載雑誌

Journal of Bacteriology 190(10):3572-3579, 2008

内 容

肺炎球菌の Lactate oxidase の乳酸発酵における働きを初めて明らかにした研究である。

-
- ・ Barysheva Oksana（ロシアからの私費留学生、博士課程修了）

論文題名

Application of unstable Gfp variant to the kinetic study of Legionella pneumophila icm gene expression during infection.

掲載雑誌

Microbiology 154:1015-1025, 2008

内 容

レジオネラの遺伝子発現を観察するために、細菌内で分解されやすい Green fluorescent protein を応用した研究である。

貝原守一賞について

（青藍会）は、九州大学医学研究院細菌学教室の故戸田忠雄名誉教授が設立され、故貝原守一先生もその一員で助教授として活躍されていた。

貝原守一先生が亡くなられた後、奥様の芳子氏（初代理事長）が故人の遺志を次いで、平成3年に財団を設立され医学を志す若い研究者を助成する活動を始めた際、細菌学教室より研究奨励賞をと申し出でがあり、青藍会貝原守一賞として平成4年に発足した。

宮崎一郎奨励賞（九州大学医学部寄生虫学教室に設置）については下記のごとく決定いたしました。

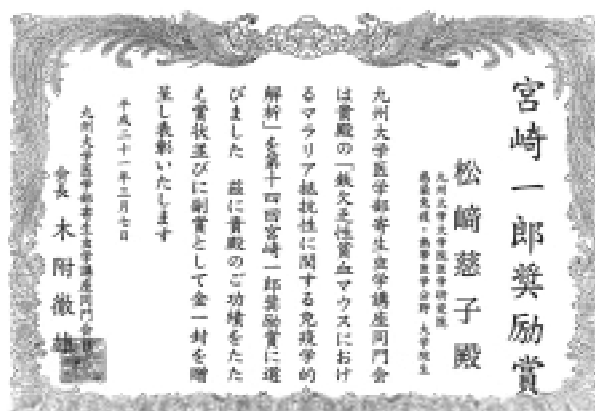
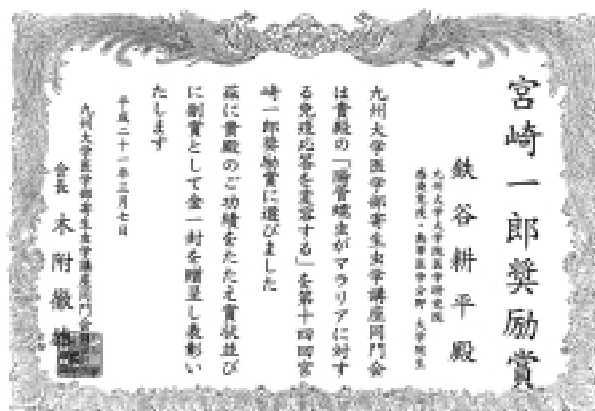
平成20年度受賞者名（敬称略）

- ・鉄谷 耕平（九州大学大学院医学研究院 感染免疫・熱帯医学分野大学院生）

研究内容 「腸管蠕虫がマラリアに対する免疫応答を変容する」

- ・松崎 慈子（九州大学大学院医学研究院 感染免疫・熱帯医学分野大学院生）

研究内容 「鉄欠乏性貧血マウスにおけるマラリア抵抗性に関する免疫学的解析」



宮崎一郎奨励賞について

宮崎一郎奨励賞は平成6年11月に創設され、貝原財団から九州大学医学部寄生虫学講座同門会に寄付されており、この資金から審査委員の推薦を経て毎年一名に授与される。

受賞の対象は同門会会員ならびに福岡県内の寄生虫学・衛生動物学者及びこれに準ずるものとなっている。

財団の主な事業報告

(1) 評議員会

| 開催年月日 | 開催場所 | 議案 |
|-------------------|------------------|---|
| 第一回 平成20年6月14日 | 福岡ガーデンパレス ホテル | 1、平成20年度事業計画並びに収支 予算案及び役員改選の件 2、その他 |
| 第二回 平成21年2月7日 | 福岡ガーデンパレス ホテル | 助成事業の概況説明 |

(2) 理事会

| 開催年月日 | 開催場所 | 議案 |
|-------------------|------------------|--|
| 第一回 平成20年6月14日 | 福岡ガーデンパレス ホテル | (1) 平成19年度事業報告の件 (2) 平成19年度収支報告承認の件 (監査報告) (3) 平成20年度事業計画の件 (4) 平成20年度収支予算の件 (5) 役員改選の件 |
| 第二回 平成21年2月7日 | 福岡ガーデンパレス ホテル | 今年度の助成事業概況について |

(3) 助成事業

| 年月日 | 行事 |
|--------------------------|---|
| 平成20年10月25日 | 貝原守一賞 青藍会・九州大学医学部細菌学教室同門会 賞金30万円を贈呈 |
| 平成20年10月25日 | 宮崎一郎奨励賞 九州大学医学部寄生虫学教室同門会 賞金20万円を贈呈 |
| 平成20年6月20日 | 平成20年度 研究助成論文応募要領送付 産業医科大、九州大学医学部、福岡大学医学部、福岡歯科大学 久留米大学医学部、九州がんセンター、九州歯科大学 |
| 平成20年12月20日 平成21年2月7日 | 助成金授与論文選考委員会 (於：福岡ガーデンパレスホテル) 平成20年度助成金授与式開催 (於：福岡ガーデンパレスホテル) 授与者3名 |

(4) 会報発行

| 年月日 | 行事 |
|-----------|------------------------|
| 平成20年6月6日 | 貝原守一医学振興財団会報 (第12号) 発行 |



昭和17年（1942）31歳

戦争と醫學

貝原守一

（一）

強大な破壊力を有するあらゆる新鋭武器、窒息性或は糜爛性毒瓦斯、コレラ菌、ペスト菌さては脾脱疽菌等々、生物體を破壊するあらゆるものの戦争への應用は、醫學の直接的戰場への助力をますます切實に要求するのみならず、前線に於ける衛生状態の保持と、銃後に於ける國防力増強に対する國民一般の健康保健のための醫學の責務はいよいよ大を加えつゝある。

云ふまでもなく、今世紀の戦争は科學的兵器を用ふる科學戦ではあるが、それが思想的民族的活動である限り全體戦であり、あらゆる方面に有機的に關聯を有することは改めて述べるまでもないことだ。醫學はこの意味に於ては、必然的に本来の任務である治療とは正反對の役割を演ずることさへあるのだ。

しかし、醫學がその起源に於いて個人の疾患を對象とする方法として存在したものである以上、だから

これまで醫學が戦争によつて損なはれた個體の修復という點に主命題を有して来た以上、醫學＝醫術と戦争との關連は當然豫防乃至治療といふ點に本来の問題が存する筈だ。

又或る意味から考へれば相反する性質を持つとも思はれる醫學と戦争との關係を本質的に論ずることは重大な問題なのだが、こゝでは軍醫制度或るは軍陣醫學に就て歴史的に簡單に眺めるに止める。

（二）

現下の事變に於いて、醫學の分野で最も活發に活動してゐるのは、云ふまでもなく陸海軍の醫學關係の機關であり常に治療に於てのみでなく、理論的基礎的研究に於ても卓越した真摯な努力がなされてアカデミー學醫と對蹠的な關係にあるとも考へられる。

（筆者・本學醫學部助教授）

九大新聞 昭和十三年十一月五日号より

今号から四回にわたり「戦争と醫學」を連載します。

なお、昭和十三年当時発行の九大新聞からの転載にあたり漢字及びかなづかいは出来る限り原文に忠実に掲載しました。

貝原守一医学振興財団

会報 第13号

2009年6月 発行

発行：財団法人貝原守一医学振興財団

事務局：〒811-1343 福岡県福岡市南区和田1-4-18

TEL：092-512-8068 FAX：092-512-8069

URL <http://www.kaibara-zaidan.or.jp>

E-Mail Info@kaibara-zaidan.or.jp